

歴史学から見た内陸文化研究

笹本 正治

(信州大学人文学部)

はじめに

信州大学がある長野県は海に面していない。同様な県として長野県と接するだけでも群馬、埼玉、山梨、岐阜の各県がある。こうした県に代表される、海から隔たっている地域を本稿では内陸と規定しておく。

内陸は多くの場合、山地と盆地、あるいは緩傾斜の台地からできている。そして、それぞれの地域を結ぶように川が流れている。日本列島は日本海と太平洋とにはさまれた中央に内陸があり、比較的海岸線近くまで内陸から走る山地が迫るために、国土の約7割から8割を山地が占めている。したがって、山地と重なる部分が多い内陸地域の持つ意味は、歴史的にも経済的にも大きいはずである。

すなわち日本を面としてとらえるならば、圧倒的多くは山地であり、日本列島の背骨にあたる地域こそ内陸なのである。地形的に平地と比較するとはるかに多様性を持ち、川や山によって人間の行動が分断されがちな内陸地域においては、地形的特質や標高による気候差などから、独自の文化が存在した可能性が高い。

このように、少し考えても様々な問題を抱えると思われる地域でありながら、内陸を独自の文化を持つ領域としてとらえ、内陸研究と銘打った歴史研究は目下のところほとんどなされていない⁽¹⁾。

日本史学の立場からすると、内陸文化研究はいかなる学問の可能性を示してくれるか、以下に内陸文化研究の意義と可能性を論じてみたい。そのために主として取り上げるのは、信州大学が立地している長野県であるが、山梨県など周囲の県にも目を配り、随時触れながら、問題を整理していくことにする。

なお、内陸ということで、ここで扱う問題は山村に関する研究と重なる部分が多い。山や山村に関する研究はこれまでに多くの蓄積があるが⁽²⁾、総合的な視点での研究はまだ少ない。

1. 農業論について

日本の国土の約7割が山地だとすると、平地は3割弱ということになる。このわずかな地域にほとんどの都市がつくられ、農業の中心と見なされた水田も広がっている。これまでの日本史学では、前近代社会における生産の中心を稲作に主体をおく農業ととらえ、農業に従事する人々を百姓とする見方をとってきた。水稲耕作を中心とする農業なくして、日本は成り立たないがとき理解をしてきたのである。しかし、近年は網野善彦氏によっ

て、百姓を農民と見る視点には見直しが迫られている⁽³⁾。日本の農業は水稻耕作を中心とするといった従来の見解を具体的に検討していくためには、内陸地域における農業のあり方を示すことが意味を持つ。

百姓は農民であると規定するに際して、農民は米を作っていたとの理解があることを述べた。日本の百姓は米を作るとして列島上の住民を同一視し、それがそのまま日本文化の均一性にまで結びつけられてきたのである。ところが、内陸地域は山間地が多く、とくに長野県などの中央高地では標高も高く、水の確保が難しい上に寒冷地なので、水田耕作や稲作は容易でなかった。当然、この地域でも農業は行われ、食料生産が行われていた。それなら内陸における農業はいかなる形態で、どのような作物を作っていたのであろうか。

内陸地域を代表する山地で広く行われていたのは焼畑であった。そこで栽培される穀物は稗や粟、キビ、蕎麦などで、陸稲も作られたがわずかであった。焼畑は耕作地が移動するため、領主側でも掌握が難しく、年貢などをとりにくかったことや、土地としての売却がなされにくいなどの条件から、関連史料が少なく、歴史的な状況がはっきり分かっていない。けれども、内陸地域で焼畑の果たした役割は間違いなく大きかった⁽⁴⁾。

焼畑と違って定畠は場所が一定し、収穫高も大きかったので、領主も掌握しやすかった。畠においても稲はほとんど栽培されず、穀物は小麦、蕎麦、粟、キビなどであった。畠では近世を例にとると、麻や木綿、たばこといった商品作物が作られたために、耕作者にとって経済的意義が大きかった。また乾燥した台地上には桑の栽培も行われ、内陸部の畠は産業史上に占める割合が大きい。内陸地域の農業では水田はわずかでほとんどを畠が担ったが、そこでは稲とは異なる作物が作られていたのである⁽⁵⁾。

一方で、山間地の谷の水をせき止めて作る谷田も内陸地域には存在した。谷田には稲も栽培されたが、標高が高くて温度が低く、日照条件の悪い場所では、水田であっても稲を作ることができず、稗などが栽培された。内陸地域では水田における稗栽培が重要な意味を持った。水田を米生産の場だとばかり見なさないためにも、内陸地域における水田で作られた作物を知る必要がある。

内陸地域においては従来農業の典型と考えられがちだった、水田を中心とした農業ではなかったことをまず確認しておきたい。それではこのような条件の下に、内陸地域の住民は何を食べていたのであろうか。主食が何であったかは、地域文化と密接な関係をもつからである。

東京の蕎麦屋の多くが更科蕎麦と名乗るが如く、信州蕎麦の名は全国的に有名である。塩尻市本山が蕎麦切り発祥の地を称したり、史料的には大桑の定勝寺だ、さらに山梨県大和村だとの蕎麦の起源論が戦わされる。いずれにしろ、内陸地域の山間地が蕎麦との関連を主張しているのである。これは内陸における農作物として穀物の中で蕎麦や小麦が重要だったことを示す。しかも同じ蕎麦といっても飯山市富倉のように山牛蒡の繊維をつなぎに入れるところ、更埴市の一部や高遠町など大根の汁で食べるところなど、その食べ方は地域差異がある。蕎麦を通じて内陸文化の一端が見えてこよう。

近年信州名物として広く知られるようになったのがお焼きである。お焼きは山梨県でも焼き餅などと称して広く食されていたが、ケの食物であってハレの食物とはしなかった⁽⁶⁾。それを正面切って商品にして売り出したところに、信州の独自性がある。お焼きの外側は小麦や蕎麦の粉、あるいはトウモロコシの粉が使われる。穀物を粉にして水で練り、それ

を囲炉裏の火などで焼いて食べるもので、生活の中の火と食物調理とが結びついた簡単な調理法といえよう。内陸地域の穀物は粉にされ、団子や麺、お焼きといった形で調理されることが多い。この点、米が粒食であることと大きな対比をなす。囲炉裏や竈の分布と調理法、食事の主体をなしていた穀物の種類など、内陸研究を通じて具体的に追求すべきことは多い。

内陸地域における重要な食物として芋を忘れてはならない。北信の千曲川流域の長芋や、東筑摩郡山形村の長芋生産は現在でも有名である。長芋は山芋の系統であるが、山地において山芋のもつ意義が大きかった。

山芋と対比されるのが里芋である。里芋については民俗学者坪井洋文氏の研究⁽⁷⁾があるが、歴史的にはまだ明らかになっていない⁽⁸⁾。正月の料理や祭礼の料理に里芋やクワイが入られることの象徴性は大きい。里芋や山芋など日本古来の芋が、農業の中でいかなる位置を占めていたかは、内陸地域研究の進展によってこそ明らかになるう。

山梨県ではジャガイモを広く植えさせたのは中井清太夫だとして、彼の遺徳を偲んで清太夫芋と呼ぶところがある。ジャガイモは標高の高い、やせた土地でも作ることができ、冷害に強かったことから飢饉の対応食としても重要であった。現在でも下伊那郡遠山地方のジャガイモは味がよいとして珍重されるが、内陸地域、とくに山村においては、ジャガイモの果たした歴史的意義は評価されねばならない。

ジャガイモは寒い地域で作られるが、暖かい地域で同じ役割を果たしたのはサツマイモである。これも水田に作られずに、人口を増やした作物といえる。群馬県ではこんにやく芋の生産が有名である。その生産地は山村を中心にしている。さらに、長野県や山梨県を歩くと、各地で菊芋が黄色い花を付けて群生しているのを見る。現在はほとんど食用にされていないが、これも備荒用として植えられたものである。

こうした、芋の役割は稲作地帯より山間地において重要だった。日本列島上で展開された豊かな食生活を知るためには、芋を通しての内陸文化研究も必要である。

現在、長野県は高冷地野菜の生産地として全国に名をはせている。また漬物としての野沢菜は全国ブランドである。焼畑においても大根や菜などが作られたが、野菜は主として畑（畠）で作られた。商品野菜の展開を含めて、内陸地域の野菜の歴史的実態、とくにどのような作物が地域で作られていたか、それがいかに変化したかを知ることが大事である。

古代より養蚕は農業の中でも特筆すべきものであった。とくに近世以降、これが大きく展開されたのは内陸地域で、上州や信州の養蚕業はその中心をなした⁽⁹⁾。明らかに養蚕は水田地帯とは異なる文化である。それが近代の岡谷や諏訪の製糸業ともつながった。日本近代の輸出品として重要だった生糸の歴史的特性を知るためには、内陸文化という視点からの見直しが必要である。

山梨県では畑作地帯にブドウが展開した。長野県ではそうした場所にりんごが多く植えられている。また、小布施町は栗で有名である。果樹として古くから注目されたのは柿である。現在でも柿や干し柿は内陸地域の特産である。甘い実だけでなく、その渋のもつ意義も大きかった。内陸地域にはこのような様々な果樹生産が行われている。近代における商品としての果樹栽培の多くは桑畑から展開を遂げたものであるが、新たな産物に飛びつく力や、社会の要求に従って農業を展開させていく理由や実態解明も内陸地域文化研究の重要な視点となる。

馬や牛などを放牧して飼育する場所が牧である。『続日本紀』の文武天皇 4 年 (700) 3 月の条に、官牧の最初の記録が見られる。官牧 (御牧) は信濃・甲斐・上野・武蔵の 4 カ国のみに設定された。『延喜式』では甲斐 3 牧・武蔵 4 牧・上野 9 牧・信濃 16 牧、貢馬数は甲斐 60 匹・武蔵 50 匹・上野 50 匹・信濃 80 匹である。歴史の中で馬の果たした役割は大きい、その産地が内陸地域なのである。しかもこの場所は養蚕地帯とも重なっている。

馬の中でも中世以降でとくに有名なのは木曾馬であった。現在でも木曾郡開田村では木曾馬の生産がされているが、戦前まで福島 (木曾福島町) の馬市は広く知られた⁽¹⁰⁾。同様に東信地方では佐久の馬市 (南佐久郡南牧村)、北信地方では小菅 (飯山市小菅) の馬市などが地域の馬取引のセンターをなした。内陸における牧畜業の実態を明らかにするためには馬の生産技術や、取引を解明する必要がある。それは同時に、内陸地域における馬頭観音信仰の広がりなどともつながろう。

中世の「一遍聖絵」を見ると善光寺門前で馬が放牧されている。また伴野 (佐久市) の市の近隣でも牛が放牧されている。このように信州では牛も生産されていたが、牛は馬の牧とどのような関係になるのであろうか。牛と馬の関係も明らかになっていない。

牧畜は内陸文化の一つといえよう。牧畜がいかに歴史的変化を遂げていったかを知るためには、内陸文化研究が不可欠なのである。

中野市や飯山市など信州北部のエノキダケ栽培は全国的に知られる。山村では椎茸の栽培も盛んである。きのこ栽培も内陸地域農業の特質といえよう。

このように内陸地域に展開された農業の実態を追求すれば、これまで農業といえば水稻耕作、それを担っていたのが百姓だとする常識に対して、アンチテーゼを提供することができる。

2. 山野の採集物

食物に関しては山野から採集する木の実などが歴史的に果たした役割は大きい。縄文文化の展開地として八ヶ岳山麓や浅間山山麓は有名であるが、その背後に木の実などがあったことが知られている。

近世以降、全国的にはドングリや栃の実などは備荒用にされたが、木曾谷などでは比較的近年に至るまでこれが重要な食物であった。これらの木の実にはアク抜きがないと食べられないが、アクを抜く文化の共有も内陸文化の一部を形作っている⁽¹¹⁾。

このほか北信地方ではブナの実が重要であったし、笹の実も備荒用に用いられた⁽¹²⁾。当然、栗が果たした役割は大きかったが、その歴史的解明もほとんどなされていない。

同様な役割をもつものにワラビ粉がある。乗鞍山麓では戦後に至るまで、ワラビ粉の生産は重要な産業であった⁽¹³⁾。くず粉やかたくり粉も山野から採取された植物の根から澱粉がとられたものである。植物の根から澱粉をとる文化は山地に広く展開していたが、実態としての分布や、技術的差異などもまた内陸文化研究の視点となる。

山地を中心とする内陸地域は、人間が住みにくく、開発が遅れただけに鳥獣が多く棲んだ。鳥獣を捕って生計を立てる者も内陸地域には多かった。江戸時代に書かれた『北越雪譜』には秋山郷 (下水内郡栄村) の猟師が描かれているが、彼らは秋田のマタギと関連した。狩猟技術から内陸地域における人移動の一端が明らかにできるかも知れない。また、

『善光寺名所図会』によれば、木曾の宿場では獣の皮や熊の胆などが売られていた。現在でも下伊那郡南信濃村には獣肉専門店がある。木曾谷は戦後に至るまで霞網猟が盛んで、渡り鳥が多く捕られた。鳥肉もまた重要なタンパク源になった。食文化の中に占める鳥獣の意義が大きいことも内陸地域の特質であろう。

このように、内陸地域では狩猟も重要な生業であったが⁽¹⁴⁾、信州でも狩猟が広く行われた⁽¹⁵⁾。諏訪社の御頭祭において多くの鹿の頭がささげられたことは、信濃にとって狩猟の占める位置が大きかったことを示す。諏訪社では遅くとも中世末以来、鹿食免、鹿食箸といった、これを所持していたり、これを使えば肉食をしても穢れることがないという、免許状を出していた⁽¹⁶⁾。肉食の免許状によって諏訪信仰は全国的な広がりを持ったのである。それだけ日本においても仏教のけがれが叫ばれる一方で、肉食が盛んだったといえよう。歴史の中に狩猟を位置付けることも大事で、それを許容した精神的なセンターは内陸にあったのである。

武士の間では鷹狩りが重要な儀礼であり、娯楽だったが、信濃から出た桶津流や諏訪流は鷹狩りの上で特別な流派であった⁽¹⁷⁾。江戸時代には信濃にも御巢鷹山が設けられ、領主が使う鷹を捕らえた。このように、狩猟技術上でも内陸地域は独自性を持つ⁽¹⁸⁾。

内陸地域には海がないが、川や海の漁は行われていた。たとえば、諏訪湖においてはやつか漁、大四ッ手網漁、投網漁などを行っていた⁽¹⁹⁾。山の中の湖には独自の漁の方法が展開されたのである。これも内陸文化の一部である。

川での漁師も同様で、千曲川や天龍川などでウグイのつけば漁、投網漁、鮎漁、梁漁などがなされた。とくに北信地方では近世まで鮭も上ってきており、その漁の意味は大きかった⁽²⁰⁾。

海のない内陸地域では、栽培漁業は展開されにくい、佐久の養鯉は珍しい事例といえよう。また近年ではヤマメやマスも養殖も盛んである。

このように、漁業にあっても内陸地域は独自の文化を育ててきた。その歴史的展開の解明も必要である。

採集という意味では、養蜂による蜜の採集も重要である。現在でも内陸地域には古くからの日本蜜蜂が飼われているが、養蜂の歴史も大事な課題たり得よう。

現在でも長野県の昆虫食は有名である⁽²¹⁾。具体的には伊那谷のザザ虫、蜂の子やイナゴが知られる。また、蚕のさなぎが絹の花として食べられている。こうした昆虫食は日本の食文化を明らかにする上で避けて通れない問題を帯びるが、その分布は主として内陸地域なのである。

山岳地帯でとられる薬草は神仙思想ともつながって需要が大きい。そうした中で近世以降とくに有名なのは木曾谷の薬草で、御嶽信仰と結びついた御嶽百草丸は現在でも全国的な需要をもつ⁽²²⁾。

採集ということでは、キノコも重要である。その多くが山からとられる。その食べ方や保存方法は内陸地域の独自の文化の構成要素となっている。

内陸地域では山菜が食生活に彩りを与える。根曲がり竹のタケノコやゼンマイなどは個人的に食べるだけでなく、商品としても採集されている。山菜の食べ方は地域によっても異なるが、食べられる山菜やキノコなどの知識、その保存技術などもまた内陸文化として記録保存していかなければならない。

3. 林業

内陸地域においては林業が盛んであった。一般に林業として想起されるのは、材木の伐採である。近世以降全国的にもっとも有名だったのは、木曽の檜を中心とする材木であった。しかし、木曽の材木を名古屋の白鳥に運ぶためには川下げが必要で、筏師といった特殊技能者や日傭などが確保されなければならなかった。木曽の材木が商品化されるのは中世末からである。木曽の材木に関しては徳川義親氏や所三男氏などの研究がある⁽²³⁾が、まだまだ積み残されている課題も多い。

信州では下伊那を中心に近世初頭に年貢として樽木（台形に割られた材木、主として屋根材に用いられた）を上納していた村がある。江戸時代の前半約 100 年で下伊那の山林が伐り尽くされてしまうほど、その搬出量は大きかった。樽木納については市村威人氏や平沢清人氏などの研究がある⁽²⁴⁾が、近年新しい研究は出ておらず、新たな視点での研究が必要である。

従来ややもすると、林業といえば木曽のような有名地域の材木伐採のみが着目されてきた。ところが林業は内陸地域の至るところで行われてきた。甲斐については近世初頭から御役杣、大鋸の存在が知られるが、彼らは佐渡や伊豆の金山開発に関係した。また関ヶ原合戦や秀吉による朝鮮侵略の際などにも従軍した。さらに木曽の山にも木を伐りに行ったという⁽²⁵⁾。彼らは実に広い範囲にわたって行動し、しかも歴史の節目に立ち会っていたのである。

近年中央大学の山村研究会が精力的な活動を続けている⁽²⁶⁾が、林業史の研究は他分野と比較すると明らかに遅れている。地域ごとの林業の実態を明らかにすることによって、内陸地域住民の生活がいかなるものであったかが浮かび上がってこよう。

山が提供していたのは建築物用の材木だけでなかった。日常生活における燃料供給もまた、内陸研究の重要な位置を占める⁽²⁷⁾。すべての人間にとって調理や暖房などのエネルギーは必要であるが、前近代においてはそのほとんどが山野の樹木に求められた。とくに都市が成立して以降、燃料は周囲の山村から都市住民以外の者によって集められたが、都市の燃料の供給システムがいかに変わっていったかを歴史的に解き明かさねばならない。内陸地域のほとんどの都市は近世になってからつくられたが、それに対応するようにその周辺の山村からは薪や炭が燃料として運ばれた。燃料の商品化によって山村の役割も変わってきた可能性がある。薪や炭の生産とその輸送などの解明は今後の課題として残っている。

燃料は都市用に求められただけでない。海岸で生産する塩の燃料用に山の住民が塩買い木と称する燃料になる木を塩生産者に渡し、その代わりに塩を入手することがあった⁽²⁸⁾。塩は人間の生活に必要な不可欠なだけに、こうした燃料を通じての海岸部と内陸部のつながりも明らかにしていきたい。

また、製鉄や窯業などでも大量の燃料を必要とした。前者の場合には質の良い炭の生産がなければならず、後者の場合には高温を出す薪が必要であった。薪炭産業の基礎になった燃料の供給実態についても解明が待たれる。いずれにしろ、こうして山は地域住民にとって生活の糧となったので、入会をめぐる争論なども近世以降頻発した。入会権を中心とする林野利用についての研究は進んでいる⁽²⁹⁾。

林業でもう一つ重要なのは、木材を加工して販売する木地屋などと呼ばれる職人たちの存在である⁽³⁰⁾。信州においては現在、木曽郡南木曽町漆畑の轆轤細工が有名で⁽³¹⁾、木地師の里を称している。上伊那郡辰野町横川には近世の木地師の墓があり、墓石に菊の紋が彫られている。木地師は惟喬親王とのつながりを強調し、近世には全国的なつながりを持っていたが、その多くが内陸地域に住み、独自の情報網も発達させていた。前近代にあって木工製品は人々の生活に深く根ざした道具だっただけに、彼らの実態を知ること重要である。

このほか長野県にあっては木工品として、下水内郡栄村秋山郷の木鉢作りや、南安曇郡堀金村の臼作りが有名である。木曽郡木祖村のお六櫛も近世中山道の旅人に喧伝され、広く知られた⁽³²⁾。こうした木工製品の具体的加工技術、その販売形態、歴史的変化なども、内陸文化解明のため調査していかななくてはならない。

木工の加工技術に関しては、曲げ物を作る櫓物師も重要であった。現在でも木曽郡檜川村奈良井を中心として曲げ物が生産されている。同じ櫓の加工としては南木曽町蘭の櫓笠がある。今では曲げ物は趣味の道具に変わりつつあるが、長らく民衆の生活を支えてきた日常品であっただけに、その歴史的な意義付けが望まれる。

なお、櫓との関係では、屋根を葺くのに用いられた櫓皮も大事である。信州や甲州は必ずしも櫓皮の山地ではないが、櫓の生産地が内陸であることは疑いなく、その採取技術や流通ルートなども明らかにせねばならない。

奈良井の曲げ物と密接な関係にあるものとして、木曽の漆器がある。木曽漆器が盛んになるのは近世以降であるが、典型的な地場産業の歴史を知るためにも、その技術伝達の系譜や実態、経済的役割を明らかにしなければならない。当然、漆職人の背後には漆掻きや製品を販売する人たちの存在もあったわけで、多様な視点からの研究が待たれる。

信州の北部を中心としてスズダケ・ネマガリダケ（根曲がり竹）が多く産する。その産地ではこれを利用して竹細工が行われてきた。とくに有名なのは現在まで続く上水内郡戸隠村の箕作り・ざる作りで、美簗細工として知られる。さらに北信地方では笠も竹を編んだものが使われた。地域特産の植物を加工して製品にする、技法や職人の生活実態解明も内陸研究のテーマとなりうる。

この側面からは、中野市の柳行李作りにも触れねばなるまい。杞柳（コリヤナギ）細工は中野市延徳沖の水田を中心に栽培されるコリヤナギを原料にして、行李などの籠類を編んだものである。明治 39 年（1906）、洪水に強いとされるコリヤナギを水害常襲地の延徳沖で試作したことが契機で、兵庫県豊岡市から技術を導入した。昭和 15 年（1940）にはヤナギの栽培面積が 130ha に急増し、下高井地方一円に広がって山間の畑地でも栽培された。第 2 次大戦中は軍需容器製造で保護され、100 人をこえる工場も出現し、24 工場で 1300 人が従事した。戦後も順調に伸びたが、1960 年ごろから急減した。

植物を編む手工業として、下高井郡野沢温泉村のアケビ細工がある。郷土玩具の鳩車、土瓶敷き、籠類などを作る。山野に自生したアケビづるを温泉の熱気と溪流に浸して外皮をはぎ、温泉土産品に加工したのが始まりである。1840 年代には商品化され、1900 年代頃には、300 戸が農家の副業とした⁽³³⁾。

こうしてみると、内陸地域がいかに林業と密接な関係をもっているかわかる。林業はそのまま平地に住む人たちの生活を支えたのである。林業は目下斜陽であるが、その理由を

含めて、今後の対応策を練るためにも、歴史研究が必要である。

4. 交通運輸業

内陸地域の交通の主体は長い間陸路によっていた。信州について触れるなら、古代の東山道、中世の鎌倉街道、近世の中山道・甲州街道、近代の国道・鉄道、現代の高速道路など、山間を縫って走る道路が歴史的に果たした役割は大きい。当然こうした道路には、旅人を相手にする宿場関係者、問屋など物資輸送にかかわる人々など、道に結びついて生業をたてる人々が存在した。

山地に住む人にも塩は必要であつたし、海に住む者も燃料などが必要だった。物資は広い範囲で動いたが、その流通には内陸の人々も関わり、民衆の生活を支えた物資輸送も道路や川沿い、湖の周辺に住んだ人々によってなされた。近世の信州では伊那谷を中心に中馬稼ぎがなされ、民衆の生活に関係深い物資を運んだ。その研究は古島敏雄氏の大きな成果があるが、その後大きな進展がない⁽³⁴⁾。また、南安曇郡奈川村などでは近世に尾州岡船と呼ばれた牛の背による物資輸送があつた⁽³⁵⁾。牛での輸送は糸魚川街道などでも広く見られた⁽³⁶⁾。両者の分布差や役割差、運んだ品物、これを担った人々などを解明することが内陸文化追求につながる。

内陸における物資輸送は信州のみではない。甲州の中道往還沿いの九一色郷（山梨県西八代郡上九一色村）や右左口（東八代郡中道町）の商人は、江戸時代に徳川家康から諸商売免許の朱印を受けているとして、全国的に物資輸送をしたり商業を行った。こうした者たちの実態解明も待たれる⁽³⁷⁾。

牛馬による物資輸送の背後には、和馬具師といった鞍などを造る職人もいたはずである。また近代でも牛馬は物資輸送や材木の山出しなどに用いられたが、農業用を含めて馬の蹄を守るためには装蹄師も必要であつた。馬や後の背後にはこうした職人のみならず、馬の売買や治療に携わる博労も存在した。

いずれにしろ、牛馬の存在は古代に設定された官牧以来、内陸地方では注目すべきであり、それを使つての物資輸送などの実態解明は大事である。

なお、牛馬を使つては運送できない険しい山の中では、人の背を用いて物資を運んだ。これがぼっかで、北アルプスなど山中では広く見られた⁽³⁸⁾。

物資輸送の実態追求をするためには、山の道の研究も進めていかねばならない⁽³⁹⁾。

内陸地域だからといって舟運がなかったわけではない。湖や大きな川においては舟が用いられた。現代に至るまで、信州の文化は南と北で大きく異なるが、そうした文化の移入路としては南の天龍川、北の千曲川が大きな役割を果たした⁽⁴⁰⁾。甲斐では富士川が重要だった⁽⁴¹⁾。武田氏が信州で築いた重要な城が大島城（下伊那郡松川町）、牧ノ島城（上水内郡信州新町）、海津城（長野市）、長沼城（長野市）など大きな川に沿っている理由には、舟運を押さえる意味もあった。

甲斐の九一色商人や右左口商人は物資輸送と関係を持ったが、全国的に有名な甲州商人のふるさとは、原七郷（中巨摩郡白根町）の商人の例を含めて豊かな農村地帯ではない。内陸地域から生まれた商人についての研究も今後の課題である。

5. 鉱業

山中ゆえに多く存在すると思われる職業として鉱山に関係するものがある。代表的なのが金山である。中でも山梨県の奥深い山中にある黒川金山（山梨県塩山市）⁽⁴²⁾、湯之奥金山（山梨県西八代郡下部町）⁽⁴³⁾の鉱山跡は、国史跡に指定されている。長野県では梓・川端金山（南佐久郡川上村）、青柳金山（茅野市）、真志野金山（諏訪市）など⁽⁴⁴⁾が有名で、地域には様々な伝承が伝わっている。このほか内陸地域には多数の鉱山跡が存在している。銀山や銅山などを含めて⁽⁴⁵⁾、内陸地域に展開した鉱山の実態を追求し、その歴史的な役割を解明することは、山村が急速に崩壊しつつある現在、早急になされねばならない。

民衆の生活に密接な金属といえば鉄である。その生産にあたっては中国地方が有名であるが、信州でも製鉄が行われていた。幕末の大日向村の茂来山（南佐久郡佐久町）では鉛や鉄鉱石の採掘が行われ、鉛は都沢で冥加永 500 文を納めて 100 日間の間掘を行った（文政 5 年「差上申御請証文之事」小須田利貞氏蔵）。嘉永 5 年（1852）の定（同氏蔵）によると、大日向鉄会所は鉄石・鉄砂・吹鉄の持ち出しを禁じ、吹大工・番工ら諸職人の給金や勤務等について定めている⁽⁴⁶⁾。

大日向山では寛政年間（1789～1801）以降、石灰が盛んに焼かれ、上田方面にまで売られた。石灰は壁に塗ったり、農業用に用いられたりしたが、塩尻市本山の山中でも作られるなど、各地で生産された。石灰生産の実態や流通などもほとんど研究されていない。

石器時代や縄文時代などにおいて、黒曜石の果たした役割は大きい。とくに八ヶ岳山麓の和田峠などから産出したものは全国的に流通した。星糞峠黒曜石原産地遺跡（小県郡長門町）や男女倉遺跡（小県郡和田村）が有名であるが、前者に明治大学の研究所ができるなどその研究は新たな段階に入りつつある。黒曜石は近年に至るまで掘り続けられただけに、その歴史的意味を全時代にわたって明らかにしていかなければならない。

似たような鉱物として水晶がある。とくに長野県と山梨県の県境に位置する金峰山からは産出した。石器としても利用されたが、幕末に御岳金桜神社の神官が京都の技術を導入して水晶を磨くようになり有名になった。硬い水晶を磨くところから派生した技術が、国の伝統産業として指定されている甲府の宝石研磨技術と、甲州印章の彫刻となって現在に結びついている⁽⁴⁷⁾。

つい近年まで、文字を書くのに硯が果たした役割は大きかった。硯の中でも古来全国に知られたのは、甲州の雨畑硯と長州の赤間硯であった。雨畑硯の原石は山梨県南巨摩郡早川町の雨畑川の流域からとれる。硯は長野県でも生産される。上伊那郡辰野町の龍溪硯は横川川と小横川川流域の粘板岩を加工したものである。江戸末期に鍋倉沢の粘板岩に着目して加工した鍋倉硯が知られたが、明治時代になると天竜硯として販売する者が現れた。赤羽幸之進（1894～1968）が昭和 10 年（1935）に時の長野県知事大村清一から龍溪石の名を得、「龍溪硯」として販売してから盛んになった。一方、松代（長野市）の村雨石は松代豊栄付近から多く産し、真田藩の頃から硯石として珍重された⁽⁴⁸⁾。

硯の製造は石の加工という側面をもつ。信州は全国的に知られた高遠（上伊那郡高遠町）石工のふるさとでもある⁽⁴⁹⁾。高遠領の藤沢・入野谷郷の住民は山村で耕地が少なく、冬の間に仕事になかったためか、石工として全国各地に出稼ぎに出かけ、九州から関東一円にその作品が残っている。現存する最古の作品は山梨県山梨市にある窪八幡神社神門前にか

けられた石の反り橋で、「神社本紀」によれば天文4年（1535）に武田信玄の父信虎が42歳厄年の祈請によって鳥居（木造）とともに架設奉納したという。

はじめ石工は冬季のみの作間稼ぎであったが、幕末になると本業化し、年中村に帰らぬ者もあった。そのため藩では各郷に「石切目付」を任命し、運上の取り立てや、仲間の取り締まりにあたらせ、不在中の田畑の作付けや、年貢、役勤めなどは村役人、五人組などに責任を持たせることにした。それで毎月「石切人別御改帳」あるいは「他国稼後改帳」を作り、村名主から代官へ出すことになっていた。ペリーが来航し開国通商を迫ると国防に意が注がれたが、嘉永5年（1852）高遠の出稼ぎ石工（藤沢郷）226人の内、100名は動員されて品川浦砲台築造工事に従事した。山の中から出る職人が日本全国を席卷したのである。

高遠石工の中でもとくに有名なのが、藤沢郷塩供（高遠町大字中村塩供）に守屋孫兵衛の3男として、明和2年（1565）に生まれ、天保3年（1832）に没した守屋貞治である。彼は生涯に336体の石仏を建立し、その足跡は信州一円はもちろん、関八州より、東海、西国は遠く山口県にまで及んだ。

内陸地域では水田や畑などを築くには石垣が利用されることが多い。治水のためにも石垣は多用された。現在棚田も放棄されつつあり、石垣が忘れ去られようとしているが、生活に密接な関係を持ち地域の石垣が、いつ頃、いかにして築かれたかを知ることでもある。

このように、種々の鉱物資源を有する内陸地域において、鉱業は重要な産業であった。しかしながら、その多様性や歴史的な実態などについては、全体的に研究が遅れている。

6. 山の中に生まれた伝統産業

林業が重要な位置を占めた内陸においては、そこから独自の技術が生まれた。その代表が大工（番匠）である。内陸の典型ともいえる飛騨の番匠は古代より知名度が高い。甲州では下山（南巨摩郡下部町）大工が有名であった⁽⁵⁰⁾。信州の場合、木曾の大工、諏訪の大工、松本山辺の大工などの活動が盛んだった⁽⁵¹⁾。

高遠（上伊那郡高遠町）の番匠村には大工池上一族の住んでいた。文亀2年（1502）の作である遠照寺（三義地区）の多宝塔（国重文）や釈迦堂（国重文）も、池上清左衛門政清の作である。池上氏は高遠城築城の時から武田氏に仕え、下伊那方面まで築城の工事に参加したので「武田の番匠」として名高い⁽⁵²⁾。西高遠の渡辺氏の屋敷内には「番匠邑之銘」の碑がある。これは文化9年（1812）6月に建てられ、碑側面には星野葛山がその由来を記している。

こうした番匠のふるさととは典型的な山の中である。木工技術と結びついた大工を明らかにすることも、内陸文化解明の鍵となる。

諏訪の大工は立川流で名高い。その基礎を築いたのは立川富棟（1744～1807）、富昌（1782～1856）で、彫刻技術に見事なさえを見せる。当時この地域で盛んだったのは、平ノ内大隅守の流れを引くといわれる伊藤儀左衛門、柴宮長左衛門兄弟に代表される大隅流であった。諏訪社の鎮座する諏訪地方では宮大工の技術が蓄積されてきた⁽⁵³⁾。彼らの活動は全国に及ぶ。その活動や技術系譜を明らかにすることも大事である。

なお、現在はほとんど姿を消したが、内陸地域の多くの民家が草葺きであった。屋根を葺く職人も多く内陸地域に居住していた。一方、中信地方では板葺きの屋根が多かった。諏訪地方には鉄平石で屋根を葺いた家も存在する。屋根葺きの材料は地域に産する資源によって異なり、屋根の傾斜も積雪量などによって変化がある。地域独自の文化に対応する職人たちの存在やその活動域なども明らかにしたい。

南佐久郡白田町には欄間彫り職人が住むが、こうした大工の伝統を引く職人たちは、内陸地域に多数存在する。

このほかにも伝統産業は多い⁽⁵⁴⁾。彫刻技術といえば、国の伝統的工芸品に指定されている飯山仏壇が関係しよう。近世飯山城下には、わずか300メートルあまりの街道筋に寺が16も建てられたといわれる。このため寺々での仏具消費が大きかった。また浄土真宗による仏教信仰が厚く、家々で立派な仏壇をしつらえ、仏具を整え、仏の供養を怠らない風習があった。慶長・元和（1596～1624）の藩政時代から続く仏壇や仏具の製造には雪国職人のねばり強さがよく現れ、専門の仕事に打ち込んで丁寧を作る。飯山は豪雪地帯で湿度が高いため漆の加工に有利で、狭い土地の労力を生かすにも適している。

地域の工業としては松本市の民芸調の家具、松本家具も存在する。

北信濃では昭和51年（1976）6月2日に国の伝統工芸品指定を受けた内山紙がある。これは下水内郡、飯山市、下高井郡木島平村で江戸時代から生産されてきた和紙である。雪に埋もれる冬季4ヶ月間、家族の手間を生かした仕事で、雪さらしで白くなる。白い丈夫な半紙、それをついだ障子紙は、雨風に強い。和紙は大町市社の松崎和紙⁽⁵⁵⁾などもあり、内陸地域の産物の一つである。

紙との関連では飯田の水引を忘れるわけにいかない。その起源は飯田地方の元結いにある。この地の元結いは文七元結いの名で知られ、元禄6年（1693）に飯田の商人によってはじめられた。元結いは地域に存在した和紙生産から発展し、冬季の乾燥した晴天の日に、屋外でよった紙に糊を付けて乾燥して作られた。明治以降、髪型の変化で元結いの需要が減じたので、これを水引にかえたものである。

似たような手工業品として、下伊那郡喬木村阿島で生産される阿島傘がある。これは1700年代初期、旗本知久氏に仕える下級武士の間で手内職としてはじまったもので、農家の副業として広がった。この地方が古くからの和紙の産地であること、温暖で竹が多かったことなどの自然条件を前提に、下級武士の手内職から発生した。

地場産業として上田から長野付近の機屋で織られる上田紬もある。江戸時代には上田藩の保護もあって大きく栄えた。

食品でも内陸地域には独自性がある。全国的に信州味噌は有名である。本来はどこの家でも自給していたが、明治10年（1877）頃、上田町寺田修敬のつくった味噌が「寺田味噌」として東京方面に移出された。明治45年（1912）年には諏訪に味噌製造組合ができた。

諏訪の寒天作りは弘化元年（1844）穴山村の小林桑左衛門が京都から技法を伝えたのが始まりで、冬の寒さと日照時間の長さが重要である。同じように飛騨でも寒天が生産される。

さらに、冬の寒い信州では氷餅・凍豆腐作りが行われてきた。

このように内陸地域では、その地域の風土に応じた独自の産業が作られてきた。地域の自然特性などに支えられ、近代における諏訪地方の精密機械など、その後も新たな工業が

生み出され、現在でも次の時代に向けて模索がされている。

7. 山岳宗教と寺院

内陸地域に存在する高山の多くが信仰の対象になってきた。代表的なのは富士山⁽⁵⁶⁾で、中世以降、多くの人が吉田（富士吉田市）から登山した。近世には富士講によって多くの人を集めた。長野県においては、御嶽⁽⁵⁷⁾が有名で、その他槍ヶ岳、浅間山などが信仰の対象になった。

内陸地域の信仰の山は古代末以降、修験道と結びついた。山国の信州で有名なのは飯縄、戸隠、小菅であった。

全国に知られる飯縄信仰は飯綱山に鎮座した飯綱神社（現在は石の小祠のみ）を本源とする。この神は天狗（小天狗）とも、狐（三狐神）ともされるが、飯縄遣と称する呪術者がとくに信仰した。その姿は秋葉山三尺坊権現と同じ、白狐に乗った小天狗である。長野県の飯綱山は三尺坊権現の出生地といわれる⁽⁵⁸⁾。

戸隠では戸隠寺（奥院）が嘉祥2年（849）に学問行者によって開かれ、康平元年（1058）には宝光院が、さらに約20年を経て中院が開かれたという。奥社の地主神として祀られる九頭竜権現が古い信仰の名残と考えられ、もともと水の神、農耕神として尊崇された。『梁塵秘抄』によって平安時代には既に修験として有名であったことが知られる。中世の戸隠は山伏の修行する霊場であったが、農業神としての信仰も強く、近世には戸隠講も結成されて多くの信仰を受けた⁽⁵⁹⁾。

小菅の中心になったのが小菅山八所権現（小菅神社）と別当寺の元隆寺であった。小菅神社の草創は、舒明天皇（593?～641）の代に修験道の開祖である役小角（役行者）が、馬頭観音の化身である摩多羅神を主神として小菅権現に祀り、熊野権現・金峯権現・白山権現・立山権現・戸隠権現などの八所権現を勧請して奉斎した。同時に役小角は小菅山元隆寺を開基創建し、小菅山八所大権現（今は八所大神と改称）の別当とした。大同（806～10）頃に真言宗となり、山内が盛隆に赴き、3院で48坊があった⁽⁶⁰⁾。

このうち飯縄と戸隠については、善光寺信仰に組み入れられた⁽⁶¹⁾。大阪府にある小山善光寺の善光寺参詣曼荼羅にも、善光寺の背後に飯縄と戸隠が描かれている。善光寺がこの両社を取り込まねばならなかったほど、この地は重要だったのである。逆に同じ北信にありながら小菅神社は位置的に善光寺と離れていたため、組み込まれなかったことも衰退の原因となったのであろう。

信州でもっとも有名な神社は諏訪大社である。諏訪信仰の中心には諏訪市と高遠町の間に鎮座する守屋山があった。この山に雲がかかると雨になるなどと伝承され、水の神とのつながりも深い。諏訪信仰には7石7木といった自然信仰が色濃く残るが、その中心に守屋山があった⁽⁶²⁾。諏訪信仰も山と密接な関係をもつのである。

このように山岳信仰には水分信仰が絡んでいる。水分信仰は長野県内の各地にあり、松本市と岡谷市の境にある鉢伏山にもそうした信仰がある。また北信では上水内郡中条村の虫倉山の研究が進んでいる⁽⁶³⁾。各地における山岳信仰⁽⁶⁴⁾を具体的に明らかにしていくことも、内陸文化の研究上大切である。

さらに地域に残る山の神信仰の問題も重要である⁽⁶⁵⁾。信仰の対象としての山研究は、日

本人の心持ちを探る上でも避けて通れない。

8. 山の災害

内陸地域は平地とは異なる災害も存在する。その代表的なものが土石流である。1996年2月の北安曇郡小谷村蒲原沢での土石流では、14人もの犠牲者を出した⁽⁶⁶⁾。土石流に見舞われやすい場所として、周囲の山が険しく、しかも山が花崗岩からなる木曽谷や伊那谷がある⁽⁶⁷⁾。とくに昭和36年(1961)のいわゆる三六災害は土石流を伴って大きな被害をもたらした⁽⁶⁸⁾。災害常襲地域には災害に関する伝承が伝わるとともに、災害対処のための独自の文化が創られてきた。今後の防災策を練るためにも蓄積された防災の文化を確認していく必要がある。また、災害がいかに展開されたか、またそうした災害を住民はいかに理解したかなどの研究が必要である。

土石流災害の一種として、富士山では春先に雪が融けて土石流となって麓に被害をもたらす雪代災害があった。地域ごとに独特な災害が存在するのである。

同じように内陸地帯で広く見られる災害に地滑りがある。山間地帯ではその被害が大きいが、昭和60年(1985)7月26日に起きた長野市地附山災害は記憶に新しい。長野県内には長野市のみならず、東筑摩郡明科町など、各所に地滑り常襲地帯がある。

内陸地域は日本の屋根であり、高い山々が屹立している。この山々に降った雨はあたかも滝のように流れ下り、急流が水害の原因になる。山梨県の信玄堤は有名であるが、こうした地形にそうように独特の治水技術も内陸に発達した。地域独自の治水技術の実態や技術系譜を解明する必要がある。

内陸地域には火山も多いだけに、火山噴火による災害も受けた。天明3年(1783)7月の浅間山噴火の被害は大きかった⁽⁶⁹⁾。現在富士山の噴火が社会的関心を呼びつつあるが、貞観6年(864)7月17日の大噴火、宝永4年(1707)の噴火などは大きな被害をもたらした。内陸地域の火山噴火は大きな災害の原因になるだけに、過去の被害から学ばなければいけない。

内陸地域で大きな被害をもたらすのは、標高が高いことによる寒冷地であるがゆえの、霜や雹といった天候による自然災害である。また冷害による農作物の被害で飢饉を招いたこともあった。

内陸地域は地形から生ずる風の関係からか、大火に見まわれることが多かった。長野県の場合、近代になってからだけでも、明治19年(1886)2月の松本町大火、同年5月の飯山大火、明治21年の松本町大火、明治24年6月の長野善光寺周辺大火、昭和22年(1947)の飯田大火などがある。こうした大火の原因や対処法の追求なども歴史学としてしていかななくてはならない。

このように、内陸地域では内陸であるがゆえ、他所では見られないさまざまな災害が起きてきた。そうした災害の実態を明らかにし、それに対処する文化がどのように創られ、どのように蓄積されてきたかを確認することもまた、内陸文化研究の大きな意義になる。それをすることによって、地域のきめの細かい防災対策が可能になるのである。

9. 文化論

これまで見てきたいずれも内陸地域には海岸部、もしくは平野部と異なった、独自の文化があることを示しているが、祭礼や年中行事には内陸文化の特性がより色濃くあらわれる。ここでも長野県を例にとって確認してみたい。

内陸文化の特性をもっともよく示しているのは、信濃伊那郡から静岡県西部、愛知県北部にかけての、国境の山岳地帯に広がる芸能である。長野県下伊那郡上村と南信濃村で年末に行われる霜月祭り⁽⁷⁰⁾、正月に天龍村坂部で行われる冬祭り⁽⁷¹⁾、阿南町新野の雪祭り⁽⁷²⁾、愛知県北設楽郡で広く行われる花祭り⁽⁷³⁾、静岡県水窪町で行われる西浦田楽⁽⁷⁴⁾、こういった芸能は芸能要素からして明らかに関連を持っている。また盆行事として行われる阿南町和合の念仏踊り⁽⁷⁵⁾、天龍村大河内、向方、坂部のかけ踊り、泰阜村の樽木踊り⁽⁷⁶⁾、上村下栗のかけ踊りなどに共通点がある⁽⁷⁷⁾。三河、駿河、信濃の国境地帯に独自の民俗芸能が残ることは、この地域が一带として文化を共有していたことを示す⁽⁷⁸⁾。

同じ下伊那の地域には飯田市の今田人形、上郷町の黒田人形、阿南町の早稲田人形なども残る。また大鹿村には大鹿歌舞伎、下条村には下条歌舞伎が伝わっている⁽⁷⁹⁾。まさにこの地域は芸能の世界である。

清内路村清内路の手筒花火、飯田市山本七久利神社の裸祭りにおける「大三国」の花火など、下伊那の花火は三河地方の手筒花火と共通性が高い。

これ以外の芸能を含めて、この地域の独自の文化存在とその成熟度は目を見張るものがある。こうした文化伝播の背景には通路の存在もある⁽⁸⁰⁾が、いかにしてその地域に文化が入ってきたのか、どのように芸能が変容したか、なぜ今に伝わったのかなどの課題は、内陸文化の実態を知る上でも興味深い。

『熊谷家伝記』は明和年中(1764～72)に坂部(天龍村)の熊谷家の第12代当主直遐が、先祖代々書き継がれてきた記録を元に整理・編集した形を取っている⁽⁸¹⁾。実際には直遐が作り上げたものであるが⁽⁸²⁾、ここには下伊那、奥三河、遠江北部という国境⁽⁸³⁾が深いつながりを持っていたことが記されている。実際、近世であってもこれらの地域は深くつながった、文化圏をなしていたのである。国や藩領域といった、政治的な枠組みを越えて存在する文化域を考えるのに、内陸地域は大きな素材を提供してくれる。

木曽郡南木曽町田立の花馬祭りは、美濃や尾張の馬塔と密接な関係をもつ。

7月22日から23日に行われる木曽福島町水無神社の神輿まくりは、飛騨国の一宮(岐阜県大野郡宮村)から伝えられたという。飛騨と木曽地方との深いつながりが読みとれる。

3年に1度ずつ飯山市小菅では7月15日に柱松柴燈神事が行われる。これと同じ祭りが木島平村中村小菅では毎年行われている。小菅の行事は7月15日の小菅神社の祇園祭りに里宮の講堂広庭において、中世以来修験者によって伝統的に行われてきた年占の火祭である。戸隠でもかつて行われていたが、現在は伝わらない。柱松神事は信濃では北信に分布しているが、この背後に文化的つながりが見られる。

小菅の祇園祭りで猿田彦が松明を持って舞った上、鳥居のしめを切る。これと似た動作としては飯山市五束の太々神楽で松明を持った天狗のしめ切りがある。飯山市桑名川、下高井郡野沢温泉村平林の祭りでも同様な行為がある。北信の祭礼には共通の要素が強いのである⁽⁸⁴⁾。

地域文化の差異を示す民俗は道祖神の形態や、これに関係する正月の火祭りによく現れ

ている。山梨県の北西部から諏訪、佐久地方には祠形の道祖神が分布する。甲府盆地では丸石道祖神がある。長野県の中信地方では双体道祖神が多く、北信地方では文字道祖神が多い。火祭りの呼び方も、それが行われる時間帯も地域によって大きな差がある。

内陸地域の細部にわたる文化圏を示すのは方言ではないだろうか。長野県では北信、東信、中信、南信といった地域区分がされるが、これに対応し、さらにより細かく地域を分けるように方言に差がある。

言葉や文化のつながりや差異は、住民の活動圏や婚姻圏の結果だろう。信濃や甲斐、上野といった国がなぜ現在に至るまで意味を持つのか、信濃の国と行った国意識や、長野県といった県の意識がいかんして作られ、それがどのような意味を持つのかを考えることも重要だろう。

おわりに

以上述べてきたように、内陸地域には独自の文化が存在する。内陸文化を明らかにすることは、日本文化の多様性を示すことにつながり、従来水田耕作を中心とした、平地からしか見てこなかった日本歴史を、多面的に理解する重要な素材を提供してくれるはずである。

日本史においては近年海民、舟運など、海からの視点による研究が進展しているが、山村研究は今もって遅れている。国土の7割以上を占める山地の研究を抜きにして、日本史の全体像は出てこないはずある。この意味でも山地が多くを占める内陸文化研究は早急に進めなければならない。

一方、現状に目を向けると、山村の過疎化が急激に進んでいる。各地で村おこしが叫ばれているが、その中でも過疎化が進む山村の叫びは悲痛である。こうした地域の求めに応じるためには、過去の分析を通じて現状を把握し、その上で未来の計画を立てていかねばならない。それなのに山村史の研究はほとんどなされていない。過疎化にあえぐ内陸地域の将来を考える上でも、この地域の研究は必須なのである。

豊かな歴史学研究の進展のためにも、内陸地域に目を据えて、その独自の文化を探索していくことが急務である。その成果によって、多様性を帯びた日本の歴史像が見えてくるであろう。

【註】

(1) 内陸をうたった研究としては、地方史研究協議会編『内陸の生活と文化』（雄山閣、1986）がある。

(2) 柳田国男『山島民譚集』（甲寅叢書刊行所、1910）、菅野新一『山村に生きる人びと』（未来社、1916）、田中喜多美『山村民俗誌』（一誠社、1933）、柳田国男『地名の研究』（古今書院、1936；『定本柳田国男集』第20巻、1962）、柳田国男編『山村生活の研究』（民間伝承の会、1937；国書刊行会より1975復刻）、宮本常一『吉野西奥民俗誌』（常民文化研究所、1937）、高橋文太郎『山と人と生活』（金星社、1943）、古島敏雄編『山村の構造』（御茶の水書房、1952）、筒井

秦蔵『山村の生態—長野県智里村の研究—』(智里村教育委員会、1953)、金沢春友『農山村社会経済史』(富貴書房、1955)、瀬戸内海総合研究会『山村の生活』(1955)、杉本寿『東北山村の聚落構造』(1957)、菅野新一『山村に生きる人びと』(未来社、1961)、宮本常一『山に生きる人々』(未来社、1964)、岩科小一郎『山の民俗』(岩崎美術社、1970)、向山雅重『山村小記』正・続(慶友社、1974)、北条浩『林野法制の展開と村落共同体』(御茶の水書房、1979)、井上鋭夫『山の民・川の民—日本中世の生活と信仰—』(平凡社、1981)、藤田佳久『日本の山村』(地人書房、1981)、羽田久男『山村地域の史的展開』(1981)、比嘉春潮他編『山村海村民俗の研究』(名著出版、1984)、姫田忠義『山に生かされた日々—新潟県朝日村三面の生活史—』(同書刊行委員会、1984)、千葉徳爾『近世の山間村落』(名著出版、1986)、大林太良編『日本の古代 第10巻 山人の生業』(中央公論社、1987)、三浦宏『伊那谷山村の変貌—その歴史地理学的研究—』(信濃教育会出版部、1988)、成城大学民俗学研究所編『昭和期山村の民俗変化』(名著出版、1990)、湯川洋司『変貌する山村—民俗再考—』(日本エディタースクール出版部、1991)、藤田佳久『奥三河山村の形成と林野』(名著出版、1992)、網野善彦他編『日本歴史民俗論集 7 海・川・山の生産と信仰』(吉川弘文館、1993)、湯川洋司『山の民俗誌』(吉川弘文館、1997)

(3) 網野善彦『「日本」とは何か』(講談社、2000)、同『日本中世の民衆像』(岩波新書、1980)、同「稲作一元論の克服」(『日本民俗文化大系 1』小学館、1986)

(4) 農林省山林局編『焼畑及切替畑ニ関スル調査(治水関係資料第九輯)』(農林省山林局、1936)、野本寛一『焼畑民俗文化論』(雄山閣、1984)、野本寛一「焼畑農民の祭り—稗酒と猿舞—」(『歴史公論』11号、1985)、小川直之「焼畑と摘田—一種肥混合播をめぐって—」(『日本民俗学大系』5、國學院大學、1984)、石川純一郎「焼畑農耕の生産儀礼」(『日本民俗学』165号、1986)、白石昭臣『畑作の民俗』(雄山閣、1988)

(5) 高橋貢「中世上野における畠作をめぐって—「長楽寺永祿日記」を中心に—」(『内陸の生活と文化』雄山閣、1986)、木村茂光『日本古代・中世畠作史の研究』(校倉書房、1992)、木村茂光『ハタケと日本人』(中公新書、1996)

(6) 『聞き書き山梨の食事』(農産漁村文化協会、1990)

(7) 坪井洋文『イモと日本人』(未来社、1979)、同「日本人の農耕観—比較民俗論への序章—」(『國學院雑誌』81巻11号、1980)、同「稲を選んだ日本人」(未来社、1982)

(8) 拙稿「戦国時代の甲斐の芋」(『山梨県史研究』第2号、1994; 拙著『山に生きる—山村史研究序説—』岩田書院、2001に収録予定)

(9) 江口善次他『信州蚕糸業発達史』(大日本蚕糸会信濃支会、1937)、平沢清人「下伊那地方の養蚕」(『日本産業史大系』第5巻、東京大学出版会、1960)、小口珍彦「諏訪地方の蚕糸業」(『日本産業史大系』第5巻)、吉永昭「北信地方の製糸業」(『日本産業史大系』第5巻)、『信濃蚕糸業史』全3冊(信濃毎日新聞社、1937; 復刻版、1975)、小松芳郎「木曾の養蚕業—新開村古畑家の場合—」(『信濃』第36巻1号、1984)

(10) 堀口貞幸「木曾駒」(『日本産業史大系』第5巻)

(11) 河西清光「どんぐり食用の習俗」(『長野県考古学会誌』3号、1965)、渡辺誠「トチのゴザワシ」(『物質文化』36号、1981)、松山利夫『木の実』(法政大学出版局、1982)、岡恵介「北上山地—山村におけるアク抜き技術—民俗社会の中での生態学的位置—」(『岩手の民俗』7号、1990)

- (12) 市川健夫「風土と食文化—照葉樹林帯とブナ林帯—」(『列島の文化史』2号、1985)、生駒勘七『木曾の庶民生活—風土と民俗—』(国書刊行会、1975)
- (13) 上町利一「朝日村秋神のわらび粉」(『ひだびと』7巻1・2号、1939)、長野県文化財保護協会編『乗鞍の歴史と民俗』(長野県文化財保護協会、1981)、拙稿「王滝村の食文化」(拙著『山に生きる—山村史研究序説—』に収録予定)
- (14) 高橋文太郎『秋田マタギ資料』(アチックミュージアムノート第12号、1937)、向山雅重「狩猟」(『日本民俗学大系』第5巻、平凡社、1959)、山口弥一郎「マタギの村」(『日本山岳風土記』5、宝文館、1960)、文化庁文化財保護部編『民俗資料選集 狩猟習俗(1)』(国土地理協会、1973)、武藤鉄城『秋田マタギ聞書』(慶友社、1977)、毛利總七郎・只野淳『仙台マタギ鹿狩りの話』(慶友社、1977)、長田雅彦『最後の狩人たち—阿仁マタギと羽後鷹匠—』(無明舎出版、1977)、文化庁文化財保護部編『民俗資料選集 狩猟習俗(2)』(国土地理協会、1978)、太田雄治「消えゆく山人の記録マタギ」(翠楊社、1979)、千葉徳爾他「座談会・日本の狩猟民の生態を探る」(『歴史公論』11巻5号、1985)、文化庁文化財保護部編『民俗資料選集 狩猟習俗(2)』(国土地理協会、1987)、須藤功『山の標的—猪と山人の生活誌—』(未来社、1991)、根深誠『山の人生—マタギの村から—』(日本放送出版協会、1991)、永松敦『狩猟民俗と修験道』(白水社、1993)
- (15) 向山雅重『続信濃民俗記』(慶友社、1996)、松山義雄『狩りの語部—伊那の山峡より—』(法政大学出版局、1977)、松山義雄『続狩りの語部—伊那の山峡より—』(法政大学出版局、1977)、松山義雄『続々狩りの語部—伊那の山峡より—』(法政大学出版局、1978)、倉科明正「三才山の鉄砲改めと狩猟」(『長野県民俗の会会報』3号、1980)
- (16) 千葉徳爾『狩猟伝承研究』(風間書房、1969)、千葉徳爾『続狩猟伝承研究』(風間書房、1971)、千葉徳爾『狩猟伝承』(法政大学出版局、1975)、千葉徳爾『狩猟伝承研究・後編』(風間書房、1977)、千葉徳爾『狩猟伝承研究・補遺編』(風間書房、1990)
- (17) 宮内庁式部職『放鷹』(吉川弘文館、1931)
- (18) 家高荒治郎「木曾の巢鷹」(『信濃』第1次2巻12号、1933)
- (19) 小林正人「近世諏訪湖の漁業」(『信濃』第11巻2号～12巻5号、1960)、小林正人編『諏訪湖漁業史料』(諏訪教育会、1960)、小林純子「戦国時代の諏訪湖の漁業と諏訪社—「船別銭」と「網渡銭」を中心に—」(『信濃』第42巻11号、1990)
- (20) 田中薫「近世犀川の川漁と鮭漁」(『信濃』第51巻2号、1999)
- (21) 長野県食生活改善推進協議会木曾支部『木曾の味』(1974)、中村吉三郎「地蜂の話」(『信州の村落生活』名著出版、1976)、田中磐『しなの食物誌』(信濃毎日新聞社、1980)、鳥居酉蔵「天竜川のザザムシ」(『長野県上伊那郡誌 自然篇』上伊那史刊行会、1962)、向山雅重「信州の蜂の子取り」(『日本民俗文化体系 13 技術と民俗(上)』小学館、1985)、向山雅重「信州のザザ虫取り」(『日本民俗文化体系 13 技術と民俗(上)』)
- (22) 楯英雄「木曾御岳百草をめぐる民俗」(『信濃』第38巻1号、1986)、『信濃の民間薬—くすりのルーツを探る—』(医療タイムス社、1990)
- (23) 徳川義親『木曾山』(私家版、1915)、日本林業発達史調査会編『日本林業発達史(上巻)』(1960)、所三男「木曾・飛騨の林業」(『日本産業史大系 5 中部地方篇』(東京大学出版会、1960)、北沢啓司『木曾の山林をめぐる歴史』(日本林業調査会、1962)、徳川義親『木曾村方の研究』(私家版、1958)、青木恵一郎『史料木曾御料林事件交渉録』(新生社、1968)、所三男「木曾・

飛騨の林業」(『日本産業史大系』東大出版会、1970)、所三男『近世林業史の研究』(吉川弘文館、1980)、大脇直泰「長野県下伊那・木曽地方の木馬」(『中部地方の民具』明玄書房、1982)、所三男「家康領時代の木曽林業—石原清左衛門書状をめぐって—」(『信濃』第35巻8号、1933)、清水祐三「木曽御料林事件の一考察(承前) —大正期御料林の返還提訴者の動向を中心に—」(『信濃』第39巻7号、1987)

(24) 市村成人「南信濃の山村におけるくれ木経済」(『信濃』2巻9号、1950)、平沢清人「伊那郡榑木山の推移」1〜3(『信濃』第14巻5・6・12、1962)、塩沢正夫「長野県南部の山間地における榑木年貢と榑木祭り」(『信濃』第38巻1号、1986)

(25) 拙稿「甲斐における近世初頭大鋸・杣制度の一考察」(『信大史学』2号、1975;『山に生きる—山村史研究序説—』に収録予定)

(26) 『中央大学山村史研究会報告集』1号〜9号(中央大学山村研究会、1992〜2000)

(27) 日本木炭史編集委員会『日本木炭史』(1960)、樋口清之『木炭の文化史』(1962)、樋口清之『日本木炭史』上・下(講談社学術文庫、1978)

(28) 市村成人「信州遠山の塩買木—山国における榑木経済の一面—」(『信濃』第1巻2号、1949)

(29) 林野庁『徳川時代に於ける林野制度の大要』(林野共済会、1954)、古島敏雄『日本林野制度の研究』(東京大学出版会、1955)、遠藤治一郎『日本林野入会権論』(林野共済会、1957)、新津亨『軽井沢山の歴史—財産 区の歩み—』(本村中村土村財産区、1958)、河野実「近世入会山の利用形態」(『信濃』第12巻9号、1960)、平沢清人『近世入会慣行の成立と展開』(御茶の水書房、1967)、和合会『和合会の歴史—志賀高原の歩み—』(1975)、平沢清人「信州伊那郡野池山の入会慣行の成立とその展開」1〜3(『信濃』第10巻2〜4、1978)

(30) 杉本寿『山村社会経済の構造分析』(1973)、杉本寿『きじや』(1952;文泉堂書店より1973復刻)、青木重孝『木地屋習俗調査報告』(新潟県教育委員会、1958)、橘文策『木地屋のふるさと』(未来社、1963)、杉本寿『木地師制度研究序説』(1967)、伊藤雅義他『川連の木地業と羽後の木地山』(私家版、1967)、文化庁文化財保護部編『木地師の習俗1 滋賀県・三重県』(平凡社、1968)、文化庁文化財保護部編『木地師の習俗2 愛知県・岐阜県』(平凡社、1969)、杉本寿『木地師支配制度の研究』(ミネルヴァ書房、1972)、藤本浩一『木地山紀行』(角川書店、1973)、橋本鉄男『近江の木地屋の伝承』(滋賀県教育委員会、1975)、杉本寿『木地師制度の研究』第2巻(清水堂出版、1976)、渡辺久雄『木地師の世界』(創元社、1977)、広川勝美編『民間伝承集成4 木地師—聖なる山人—』(創世記、1979)、橋本鉄男「漂泊生業者論への視角」(『日本民俗学』121号、1979)、橋本鉄男『ろくろ(ものと人間の文化史33)』(法政大学出版局、1979)、杉本寿『木地師と木形子』(翠楊社、1981)、須藤護『日本人の生活と文化5 暮らしの中の木器』(ぎょうせい、1982)、宮崎清・鈴木茂雄編『三州足助木地屋物語』(足助町緑の村協会、1991)、橋本鉄男『漂泊の山民—木地屋の世界—』(白水社、1993)、滋賀県教育委員会『近江木地屋の生活伝承』(滋賀県文化財調査報告書1、1995)

(31) 大蔵政弥「木曽漆畑記録簿」(1927;『近世民衆の記録4・流民』新人物往来社、1971)、仁科叔子「木地屋の話」(『長野』41号、1972)、楯英雄『木曽谷の木地屋』(御宿寝覚宿、1980)、楯英雄「奥信濃山ノ内温泉郷の轆轤細工—堀内安治さんの製作品を中心として—」(『長野県民俗の会会報』7号、1984)、松山義雄『深山秘録—伊那谷の木地師伝承—』(法政大学出版局、1985)、宮下慶正『信濃の木地師』(ぎょうせい、1987)

- (32) 中西悦夫他『木曾一歴史と民俗を訪ねて一』(木曾教育会、1968)、『木曾のお六櫛』(木祖村教育委員会、1975)、読売新聞長野支局『ひのきの里』(草風社、1975)
- (33) 荒川久治『信州の職人』(第一法規出版株式会社、1974)、楯英雄 他『信州の伝統工芸』(信濃毎日新聞社、1979)
- (34) 古島敏雄『信州中馬の研究』(伊藤書店、1944;『古島敏雄著作集』第4集、東京大学出版会、1974)、小野木大乘「信濃松本地方における流通機構の変質過程—中馬輸送の展開を中心として—」(『信濃』第20巻7号、1968)、山内尚巳「伊那街道山間村における中馬稼の展開—伊那郡浪合村を中心として—」(『信濃』第32巻7号、1980)、五十嵐富雄「信州中馬の信州街道出現とその展開」(『信濃』第34巻9号、1982)、橋詰文彦「信州中馬の装束—布製品について—」(『信濃』第48巻5号、1996)
- (35) 小穴芳実「牛稼村の展開過程—信州安曇村焼山村の場合—」(『信濃』第8巻5号、1956)
- (36) 亀井千歩子『塩の道・千国街道—人と道の民俗記—』(国書刊行会、1976)、胡桃沢勘司「大町・糸魚川街道における牛方の行動期について」(『長野県民俗の会会報』3号、1980)
- (37) 拙稿「九一色郷特権の成立について」(『磯貝正義先生古稀記念論文集・甲斐の地域史的展開』雄山閣、1982)、拙稿「九一色郷商人の展開概要」(『甲斐路』27号、1975;ともに『山に生きる—山村史研究序説—』に収録予定)
- (38) 胡桃沢勘司「野麦街道の交通伝承—第三報・飛騨ボッカの活動—」(『信濃』第35巻1号、1983)
- (39) 胡桃沢勘司「山地交通路の研究視点—ケ・ハレ両極連携の試み—」(『信濃』第37巻1号、1985)、宮本常一『山の道』(八坂書房、1987)
- (40) 米山一政「千曲川通船について」(『信濃』第12巻4号、1960)、阿部訓久「千曲川通船成立過程の研究—延享期〜寛延期における通船出願をめぐる争論を中心として—」(『信濃』第44巻8号、1992)、拙著『川中島合戦は二つあった—父が子に語る信濃の歴史—』(信濃毎日新聞社、1998)
- (41) 青山靖『富士川水運史』、柳平千彦「富士川通船と商品流通—高島藩領の御廻米移出と塩の移入を中心として—」(『信濃』第37巻11号、1985)、『甲斐の道づくり・富士川の治水』(建設省関東地方建設局甲府工事事務所、1998)
- (42) 村上直「黒川金山」(『日本歴史』141号、1960)、黒川金山遺跡研究会『黒川金山・第一次調査報告』(1987)、黒川金山遺跡研究会『黒川金山・第二次調査報告』(1988)、笹本正治「戦国大名武田氏の金山支配をめぐる」(『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第3集、1990)、黒川金山遺跡調査会・塩山市教育委員会『黒川金山史料』(1991)、笹本正治「博士と金山」(『中世を考える 職人と芸能』、吉川弘文館、1994)、萩原三雄「甲州金山における中世と近世」(『山梨考古学論集Ⅲ』、1994)、大藪宏『多摩川源流の黄金郷 戦国武田の黒川金山』(山梨日日新聞出版局、1995)、黒川金山遺跡研究会・塩山市教育委員会『黒川金山—山梨県塩山市に所在する戦国時代金山遺跡の総合調査—』(1997)、今村啓爾『戦国金山伝説を掘る—甲斐黒川金山衆の足跡—』(平凡社、1997)
- (43) 湯之奥金山遺跡学術調査団『湯之奥金山遺跡の研究』(山梨県西八代郡下都町、1992)
- (44) 今井真樹「真詰野村外山島帳より見たる金掘と新田開発並びに入会問題」(『信濃』第2次19巻1号、1944)、川上礼三「長尾金山の沿革」(『信濃』第2巻12号、1950)、古川貞雄「信濃における豊臣氏の蔵入地と金山」1~4(『信濃』第20巻6~9号、1968)、小葉田淳『日本鉾

山史の研究』(岩波書店、1968)、日本学士院編『明治前日本工業技術発達史(新訂版)』(臨川書店、1982)

(45) 浅川益二郎「赤芝銅山について」(『信濃』第3巻11号、1951)、御嵩雄司「近世高井郡米山硫黄鉱山の研究」(『信濃』第22巻7号、1970)

(46) 『長野県の地名』(平凡社、1979)、由井俊三「信州の鉄鉱資源一大日向鉱山(茂来山鉄山)の鉱床一」(『信州の人と鉄』信濃毎日新聞社、1996)

(47) 甲府商工会議所『水晶宝飾史』(1968)、小沢秀之『水晶ものがたり』(私家版、1971)

(48) 窪田一郎『硯の知識と鑑賞』(二幻社、1977)

(49) 北原通男「信濃高遠石工の他国出稼ぎについて一相模・上野に現存する作品を踏査して一」(『信濃』第19巻3号、1967)、曾根原駿吉郎「高遠石工守屋貞治の『旅日記』」(『信濃』第20巻3号、1968)、曾根原駿吉郎『貞治の石仏一幻の石工を求めて一』(講談社、1969)、曾根原駿吉郎『太良兵衛の石仏一三千点の記録を探る一』(講談社、1971)、井上清司『野ざらしの芸術一守屋貞治の石仏』(創林社、1982)

(50) 『岐阜県の歴史』(山川出版社、2000)、拙稿「職人と職人集団」(『日本の近世7 身分と格式』中央公論社、1992)

(51) 生駒勘七「近世における信州木曾大工の実態」(『信濃』第22巻11号、1970)

(52) 拙稿「室町幕府御大工池上家の文書について」(『信濃』第43巻11号、1991)

(53) 細川隼人「諏訪に於ける大隅流及立川流の大工」(第2次『信濃』第17巻8~11号、1942)

(54) 信濃教育会『長野県の特産産業』(信濃毎日新聞社、1933)、荒川久治『信州の職人』(第一法規出版、1974)、『信州の伝統工芸』(信濃毎日新聞社、1979)

(55) 臼井潤「郷土の伝統産業一宮本和紙から松崎和紙へを中心に一」(『信濃』第50巻10号、1998)

(56) 伊藤堅吉『富士山御師』(図譜出版、1968)、岩科小一郎『富士講の歴史』(名著出版、1983)、平野栄次編『富士浅間信仰(民衆宗教叢書16)』(雄山閣、1987)

(57) 宮田登「木曾御嶽講の展開とその性格」(『山岳宗教史研究叢書8』、1979)、御嶽神社社務所『木曾おんたけと御嶽神社』(1961)、生駒勘七『御嶽の歴史』(木曾御嶽本教総本庁、1966)、鈴木昭英編『富士・御嶽と中部霊山』(名著出版、1977)、菅原寿清「木曾御嶽信仰における宗教的世界観一H教会を事例として一」(『麗沢大学紀要』32号、1981)、青木保『御岳巡礼一現代の神と人一』(筑摩書房、1985)、生駒勘七『御嶽の信仰と登山の歴史』(第一法規、1988)、小林寛二「立科町の御嶽信仰一芦田古町を中心にして一」(『長野県民俗の会会報』11号、1988)

(58) 小林一郎「飯綱と文学」(『長野』28号、1969)、小林一郎「飯綱信仰の歴史」(『長野』31号、1970)、麻場長男「信州飯綱山の神仏」(『長野』162号、1994)

(59) 小林健三「戸隠山修験神道の新研究」(『日本神道史の研究』至文堂、1934)、『戸隠 歴史と伝説』(長野戸隠史説研究会、1961)、関川千代丸「戸隠に関する資料目録」(『長野』31号、1970)、『戸隠 総合学術調査報告』(信濃毎日新聞社、1971)、宮沢和穂「戸隠信仰の源流一『日本書紀』記載の「水内神」を再考する一」(『信濃』第50巻8号、1998)

(60) 『小菅神社とそのまつり』(飯山市公民館・市立飯山図書館、1955)、鷲尾恒久編『小菅の夏物語・柱松一百人の主役たち一』(小菅神社氏子総代、1993)

(61) 小林計一郎「戸隠・飯綱信仰と善光寺」(『長野』、1993)

- (62) 宮地直一『諏訪史』第2巻 前・後(信濃教育界諏訪部会、1931)、村岡月歩『諏訪の祭神』(雄山閣出版、1969)、『諏訪信仰習俗』(長野県教育委員会、1972)、『諏訪大社』(南信日日新聞社、1974)、三輪磐根『諏訪大社』(学生社、1978)、宮坂喜十『諏訪大神の信仰』(下諏訪町博物館、1979)、今井廣亀『諏訪大明神畫詞』(下諏訪町博物館、1979)、信濃毎日新聞社編『諏訪大社』(信濃毎日新聞社、1980)、金井典美『諏訪信仰史』(名著出版社、1982)
- (63) 宮島潤子「虫倉山・大姥・山姥・鬼女・木食一山に魅せられた村人の信仰―」(『長野』144号、1989)、西沢久徳「虫倉山と大姥明神」(『長野』147号、1989)、『むしくら―虫倉山系総合調査研究報告―』(長野市教育委員会、1994)
- (64) 曾根原駿吉郎「有明山の開山」(『長野』44号、1972)
- (65) 倉科明正「山の神信仰とその祭り―松本市三才山宇本郷山の場合―」(『長野県民俗の会会報』21号、1998)
- (66) 拙稿「災害文化と伝承―長野県小谷村の土石流災害と伝承―」(『京都大学防災研究所年報』第41号B-2、1998)
- (67) 『国土問題 特集南木曽地方防災環境論』(『国土問題』21号、1980)、拙稿「災害文化としての伝説―長野県南木曽町の蛇拔災害を中心に―」(『災害多発地帯の「災害文化」に関する研究』、1993)、拙稿「大正十二年の木曽谷南部水害と伝承」(『内陸地域文化の人文科学研究』1、1994)、拙稿「『新刻名古屋噺』をめぐって―木曽山と災害観―」(『信濃』第45巻5号、1993)、笹本正治『蛇拔・木霊・異人―歴史災害と伝承―』(岩田書院、1994)
- (68) 『語り継ぐ災害の記録』(昭和36年災害20周年記念行事実行委員会出版部、1981)
- (69) 小諸尋常高等小学校『浅間山』(1910; 国書刊行会より1981復刻)、大石慎三郎『天明三年浅間大噴火日本のポンペイ鎌原村発掘』(角川選書、1986)、児玉幸多他編『天明三年浅間山噴火史料集』上・下(東京大学出版会、1989)
- (70) 長野県教育委員会編『遠山まつり』(1956)、信濃毎日新聞社編『信州の芸能』(信濃毎日新聞社、1974)、向山雅重・柴崎高陽『民俗と芸能』(信濃毎日新聞社、1981)、塩沢正夫「湯立神楽で知られると遠山谷の霜月祭」(『信濃』第34巻7号、1982)、宮本辰雄・向山雅重『霜月まつり』(信濃教育会出版部、1985)、秋葉弘太郎「遠山土佐守伝承と霜月祭り―伝説と郷土史研究者の解釈との交錯―」(『信濃』第45巻9号、1993)
- (71) 長野県教育委員会編『坂部の冬祭り』(1962)
- (72) 伊藤増蔵『信州新野の雪祭』(稿本、1930)、長野県教育委員会『雪まつり』(1955)、中村浩・三隅治雄編『雪祭り』(東京堂出版、1969)、向山雅重「雪祭り」(『日本民俗研究大系』第6巻、おうふう、1986)
- (73) 早川孝太郎『花祭』(岡書院、1930; 『早川孝太郎全集』第1・2巻、未来社、1971)、武井正弘「花祭の世界」(『日本祭祀研究集成』4巻、名著出版、1977)、後藤淑「三河の大神楽」(『民俗と歴史』7号、1979)、藤田佳久「奥三河山村の入り混じり村と花祭り」(『五街道』14、1983)、後藤淑「花祭り」(『日本民俗研究大系』第6巻、おうふう、1986)、山崎一司『隠れ里の祭り』(富山村教育委員会、1987)、山崎一司『失われた祭り』(富山村教育委員会、1991)、山崎一司『熊谷家伝記のふるさと』(富山村教育委員会、1992)、愛知大学総合郷土研究所『花祭論』(岩田書院、1997)
- (74) 須藤功『西浦のまつり』(未来社、1970)
- (75) 『あなんまち和合の念仏踊り』(阿南町、1974)

- (76) 塩沢正人「長野県南部の山間地における榑木年貢と榑木祭り」(『信濃』第38巻2号、1986)、拙稿「榑木踊りをめぐって」(『山に生きる—山村史研究序説—』に収録予定)
- (77) 中村浩『かけ踊り覚書』(信濃毎日新聞社、1983)
- (78) 全体としては、村沢武夫『伊那の芸能』(伊那市学会、1967)、三隅治雄『芸能の谷』全4巻(新葉社、1986)、『目で見える信州の祭り大百科』(郷土出版社、1988)がある。
- (79) 『黒田の浄瑠璃』(今田人形保存会、1973)、『今田人形芝居』(長野県飯田市教育委員会、1979)、唐木孝治『人形芝居の里—信州伊那谷—』(信濃毎日新聞社、1998)
- (80) 高坂友喜「遠山谷文化と交通」(『信濃』第2次20巻1号、1945)
- (81) 竹内利美『「熊谷家伝記」の村々—村落社会史研究—』(御茶の水書房、1978)、小川茂男『落人の道—下伊那のかくれ里—』(誠文堂新光社、1984)
- (82) 拙稿「『熊谷家伝記』の成立」(平凡社『月刊百科』368・371号、1993)、拙稿「雪祭りと『熊谷家伝記』の村々」(『中世の風景を読む3 境界と鄙に生きる人々』新人物往来社、1995；ともに『山に生きる—山村史研究序説—』に収録予定)
- (83) 安藤恵一郎・矢守一彦『国境の村』(学生社、1972)
- (84) 斉藤武雄『奥信濃の祭り考』(信濃毎日新聞社、1982)